

抑留入所
空修理廠にて終戦
昭和二十年十月 タイシエット收容

内地帰還
昭和二十四年九月、盛岡市に帰還

国鉄盛岡工場復職

昭和五十一年三月退職

昭和五十一年四月、有限会社小笠原

商店入社

昭和六十年十月退職

(岩手県 田辺 壮久)

シベリア抑留記

静岡県 小川賢介

一、生い立ち

大正十年(一九二二)三月二十八日 千葉県銚子市下穀町に生まれる。銚子中央小学校、県立旭農学校を経て、

昭和十六年(一九四一)三月 盛岡高等農林学校農産加工学科を卒業。

四月 日東製飴株式会社(東京都荒川区尾久六丁目)入社。

十二月八日、大東亜戦争勃発。

世は正に風雲急となる。銃後の国民は食糧難に苦しむも、職業柄、甘味品等に不自由することなく生活することができた。

昭和十七年三月二十日 応召のため退社。

四月 三島市中部第九部隊へ現役兵として入隊。
家族構成 父小川信一は地元のヤマサ醤油株

式会社勤務。母小川尾上との間に男子六人と女子四人の子女あり。この中、男子二人が病死。私は次男である。

二、入隊以後

昭和十七年四月、私は現役兵として三島市中部第九部隊(野戦重砲第二連隊)に入隊し、一期の検閲の後、同年十月に渡満を開始した。一個中隊四十人の六個中隊三百人の他に、将校二人、下士官十五人ほどより成る編成で三島駅を出発した。兵隊は下関で完全武装して釜山に渡った。さらに釜山から貨車で京城(ソウル)を経由し、新義州より満州へ入った。この時、貨車の中は白く凍りつく寒さであった。三日ほどかかって錦州に到着した。錦州の部隊宿舎は、もともと支那軍の放棄した兵舎であったが、そのまま我が軍の兵舎として接收し使用されていた。そこへ我が部隊が入ることになった。その後二カ月経過した十二月二十五日に、部隊の移動が始まり、北の方の牡丹江八面通の兵舎に移った。八面通での演習訓練は想像以

上に厳しく苛酷なものであった。

昭和十八年四月に憲兵下士官募集の通達があり、早速私は応募し、試験の結果合格した。直ちに新京(長春)憲兵教習隊へ入隊し、法律・警察・教育・銃剣術・語学(ロシア語選択)を専修として受講し、半年ほどして計らずも肋膜炎を患い、新京の陸軍病院へ入院した。その一カ月後に教育隊からの退校を命ぜられ、また元の野戦重砲部隊(三七六五部隊)に戻り、元の一兵卒として勤務することになった。

昭和二十年三月、綏南第八八部隊大山隊へ転属になり、陸軍上等兵に昇進した。綏南での新部隊は満州各地から選出された歩兵砲部隊で、大山少尉という温厚な将校によって統率されていたので、日常の演習訓練は穏やかで気楽なものであった。私は同年四月一日より、ムーリン地区の陣地構築のため派遣された。ここでは山崎少佐が広大な範囲にわたって陣地構築の陣頭指揮をとっていた。私はこの山崎少佐の馬当番兵となり、旅団司

令部の兵舎に居住することになった。

三、ソ連の侵攻以後

昭和二十年八月九日未明の三時過ぎに非常召集があり、全員宮庭に集合した。制服姿の某将校より次の緊急指示があった。「ソ連が侵攻してきた！各分隊は武装して集合し、直ちに戦闘態勢に入れ！」

その後は無我夢中で同僚相集い、ムーリン地区の山に赴いた。山中で一先ず体勢を整え、振り返ると、敵の照明弾が我が部隊兵舎を照らし、怪しく浮かび上がらせるのが望まれた。間もなく敵によつて部隊兵舎は焼き払われ、厩小舎も焼かれ始めた。ここで、直ちに兵隊らは全員山の上へ後退するように命ぜられた。将兵、馬などの大部分が山に後退し、やがて夕闇が訪れた。

夜中、連隊長が、突然、私と田子佐三上等兵を呼び出した。彼は、国境に残っている留守部隊(約八十人の将兵)を誘導して来るようにと我々に命令した。我々二人は夜中の一時に国境へと向かつ

ぞ」と言わんばかりの恐ろしい形相で、ピストルを片手にして物々しく立ちはだかつていた。その姿は、いかにも印象的で恐ろしく思い出された。

この後、二人は道路には出られなくなり、山中を北の方に向かって、草木を掻き分けて歩き回ることとなった。やがて日が暮れ、あたりは真つ暗になり、馬の歩くのに任せて進む羽目となった。そのうちに下の方に微かに道路らしいものが見え始めた。思わずまた道路に降り、二人は歩き易いなどと言いながら進む。道路への誘惑に勝てなかったのである。ふと遠くを見ると、自動車の明かりが見え始めた。「あつ、また敵の自動車だ！」と感じ、思わず直ぐ傍らの側溝に寝そべり、死んだ振りをした。敵か味方か分からない車は、我々には構わず走り去り、難なく一命を取り留めることができた。この苦い経験は、その後二人が道路へ出ようとする誘惑に対し強い拒否反応を与える結果となった。二人は、今後絶対に道路に出ないようにししようと誓い合つたのである。とにかく、自

た。ソ連の侵攻して来る道を歩き始めた。二人とも勇み立つて任務を遂行しようと誓い合つた。しかし一方では、全く無茶で乱暴な命令を出したものだと思ふるとともに、悲壮な思いで夜陰に紛れて国境へと進んで行つた。

やがて夜が明け、我々二人が道路下の草叢で用を足した直後のことである。およそ二メートル先の道路上を小型戦車が進んで来るのに気づいたのである。我々は危険を感じ、草叢の中を反対側の山あいに向かって急遽退去した。敵はこちらには目もくれず、我々の来た方向へと進んで行つた。

それに続いて機動部隊が続々と侵攻して来た。我々は山中に逃げ込み、命拾いをして、思わず安堵の胸を撫で下ろしたのである。と同時に、思わず恐怖に身震いを感じたのである。あの時我々が道路下に降りていなかったら敵と鉢合わせとなり、撃ち殺されていただろうと思うと、身の毛もよだつ気持ちだったのである。事実、先頭の小型戦車の上の兵士は、「日本人を見たら撃ち殺してやる

分達の身の安全を計るのが第一だと考えながら北の方角を目指した。

しばらく山の中を歩いていると、馬諸共に湿地帯へ入り込んでしまった。驚いた馬は安全地帯へと逃げ走つた。その途端に私は落馬して、一時人事不省となつてしまった。田子上等兵に抱きかかえられて。声をかけられている中に意識を回復した。彼は、「おお！ 気がついたか」と言つて喜んだ。彼の呼びかけがなければ、どうなつたか分からない。危ない窮地から戦友に抱きかかえられ、声をかけられて蘇ることができた。九死に一生を得た感があった。

我々は元氣を取り戻して、これまで通り馬と一緒に歩いていると、どこからか騒がしい人声と車の音がして来た。小高い所に移動して音のする方角を眺めると、ソ連の機動部隊が延々と長い列をなして下の道を進んで行くのが目の当たりに望まれた。我々はすかさず反対斜面の山の中に移動し、難を逃れた。

このようにして逃れた山中を進んでいると、国境方面から日本人らしい兵隊と女子供の数人の人々が一団となって逃げてくるのに出会った。しかし夕闇のため相手が確かに日本人であるかどうか分からない。木の下や土手の陰で一緒に野宿することとなったが、夜明けと共に相手が紛れもなく日本人であることが判明した。すかさず、我々双方は「今後はお互いに協力して目的地まで行動を共にしよう」と約束した。やがて朝になり、空腹に襲われた。我々も相手方も食糧を持っていない。相手方のリーダーと思しき人が、我々の馬を食糧として提供するように要求した。我々は、自分達にとって大切な馬を食糧にすることはできない。この要求を拒否せざるを得なかった。空腹に耐えながら山道をしばらく小走りに移動した。突然近くに満人の家を発見した。もちろん無人であった。家の中に入って探してみると、米・麦・稗が蓄えられているのが見つかった。これこそ天の恵みであった。早速、これで食事を済ませ、残りの食糧

て多勢の列に加わって東京城へと向かった。日本敗戦は口惜しく残念ではあるが、今のところはどうする術もない。おとなしくソ連に投降しようと思心した。

四、ソ連に投降

東京城の収容所へと向かう途中で、ソ連将兵が乗馬姿で走って迎えに来た。同じく乗馬姿の私に下馬を命じた。私は「パルスキー ヤズイク マーロ ズナーユ(ちよつと待って下さい。私はロシア語を少し知っています!)」

「。パータムウ ザ サアプシシェーニエ ポーリザヴァツツア ローシャチ(だから連絡のため馬を使います!)」と言ったのである。するとソ連の将校らしい人が、

「ノー ガバリー イジ シュダー(ともかくも話しながらこちらへ来なさい!)」と言ったのである。

それで馬から降りて直接交渉に入った。日本の将兵は多勢いるものの、言葉が分からず、全く困

を馬に積んで再び目的地に向かった。お陰で馬を食糧にせずに済み、我々双方は和解して、また一緒に行動を続けたのである。

そのうちに、ある平坦な野原に暮舎が見えた。その傍らに下士官が立っている。彼は我々一団の姿を見て、

「君らはどこから来たか。日本はもう戦争に負けた。」

と言った。我々一同はびっくり仰天して、全く信じられない気持ちで相手と顔を見合わせた。最早、連隊長から与えられた命令も無意味なものとなってしまった。ここでやむを得ず、我々は下士官の指示通り目的地の東京城へと向かった。やがてどこからともなく数人の日本の将校が現れ、我々と一緒に、なす術も無く東京城に向かった。

途中、ある日本兵数人が私達に声をかけてきた。「このまま、このグループとは別れて自由行動で朝鮮を目指して逃走しよう」と言うのである。しかしこれは危険だと判断し、その誘いを振り切つ

惑状態であった。将兵の中に英語で話しかける者もいたが、ソ連将校の誰一人にも通じず、全く絶望の状態で、その有様には全く隔靴搔痒の感があった。結局、私が下手ではあるが、ロシア語で筆談したりしながら通訳の役割を果たすことになった。ソ連の将校は「日本はすでに戦争に敗れ、国土全体が爆弾で滅茶苦茶の壊滅状態になってしまった。アメリカのアートルムナヤ・ボンムバー(原子爆弾)で日本の都市が跡形も無くなってしまうぞ!」と言った。この時、彼は原子爆弾が投下された都市の名前には言及しなかった。

私がソ連の将兵と話している様子を見たある日本の将校は、恐い顔をしながら、一兵卒のくせにロシア語を喋りながら得意になっているなどと言って、私を中傷した。敗戦の口惜しさを、私を中傷し、私に当り散らすことで紛らわしているように思われた。

私は田子上等兵と共に伝令で隊を離れていた。その後、田子上等兵とも別れてしまっていた。そ

のため九州の歩兵隊（隊長は群馬県出身の須田少佐）に合流させてもらい、収容所に一先ず落ち着いた。およそ二千人の人数で、将兵と地方出身の女性を含んでいた。しかし詳しい人員構成と正確な人数は不明であった。

東京城の収容所に日本将兵が収容されてから、ソ連兵の掠奪が始まった。その都度、私が呼び出されて交渉に当たった。しかしほとんどの場合、盗られた物は戻らず、結局盗られ損に終わった。用便中、万年筆・時計・金銭等を持ち逃げするソ連兵が毎夜のように横行した。

昭和二十年八月二十一日、突然ソ連軍より、近いうちに移動が始まるという通達があった。最初はどこへ行くのかと聞いても、「ヤ ニエズナーユ（私は知らない）」と言っていたが、翌日の夕方頃になってようやく「ダモイヤポーニヤ（日本へ帰る）」と言って来た。我々日本兵は躍り上がって喜んだ。次の日の夕方になってから、ソ連兵は「ダモイ（帰る）だから準備せよ」と言って、我々を

名の読み取れない場所に停まっていた。そのため我々がどの辺りにいるのか判断がつかなかった。当然、我々は、もはや、日本へ帰ることなどあり得ない、やはりソ連領内に連れて行かれるのだと疑い始めた。貨車内の兵士達にも、朝鮮を経由し帰国するというのは嘘だ、シベリア行きだという噂が広まり始めた。

今や帰国など、考えられる状況ではなくなってしまう。もちろん、終戦の詔勅など知る由もなかった。我々日本兵は、ソ連軍に投降と同時に武装解除となり、ソ連軍の命令ですべての行動をとるようになっていた。隊全体でまとって投降した日本兵の中では、上官・下士官・兵の序列はあっても、元の軍隊のように厳しくはなく、上官でも威張っておられなくなってしまう。今はただソ連の将兵の指揮のみが唯一無二のものとなってしまうた。

五、シベリア抑留

日本将兵を乗せた貨物列車が駅に着くと、ソ連

営庭に集合させ、人員点呼を行った。その後四列縦隊で行軍が始まった。駅の停車場へ行くと思ったら、東京城から四キロメートルも行軍した後、鉄道線路の近くの野原に集合させられた。日が暮れてから二時間も三時間も待たせた揚句、ようやく夜中の十時過ぎに貨物列車が来た。厳重な人員点呼が行われた後に貨車に乗った。

ソ連兵にどこへ行くのかと聞いたが、行く先を教えなかった。真っ暗な貨車の傍らを通るソ連兵に「どこへ行くのか」と何回も尋ねた。彼は、「ヤポニーヤ（日本）」とだけ答えた。散々待たされた後、深夜に汽車は出発した。何時間か走った後、汽車は止まった。ここで給食・給水・用便を済ますよう指令が出された。外はまだ暗く午前四時頃かと思われた。

約一時間の停車の後に出発し、午前十一時頃、ソ連の小さな部落の駅に到着した。直ちに用便・給水を済ます。この時、ソ連側の故意かどうかは定かではないが、汽車は駅を少し行き過ぎて、駅

の地方人が物珍しげに我々を見に来た。これがしばしばであった。ある時、十八歳ぐらいの少女が貨車の傍まで歩み寄ってきたことがあった。彼女は、「ヤポンスキー、サムライ、ゲイシャ（日本の侍、芸者）」などと言いながら、興味深げに我々を見守った。何と時代遅れのことを言うのだろう。何気なく見ると、赤いスカートに素足で跣のままであった。ソ連の貧しさを見せ付けられた気がした。その他にも十五歳ぐらいの男の子二人がタバコをスパスパ吸っている姿や、向日葵の実を食べている子供達の姿が見かけられた。ソ連の一般の国民生活がいかに窮乏しているかが想像される光景であった。

東京城を出てから二週間ぐらい経ってから停まった所は、樺太の対岸から西に八百キロメートルのコムソモリスク市という小都市であった。我々はこの地に抑留されることになった。時に昭和二十年九月十日（頃）のことであった。

我々は一先ずコムソモリスク第四収容所に入る

ことになった。八月二十五日に満州から貨車に閉じ込められ、日本に帰ると言って騙されて連れて来られたことを思い、口惜しさに耐え切れない思いがした。さらにこの先、寒い収容所生活がどのようなものであるか思いやられ、打ちひしがれた思いがしたのであった。

宿舎とは名ばかりの板張りの粗悪な建物で、寝具は二人で毛布一枚、食事は高粱の粥、黒パン一切れ(たまに米の粥を飯盒に一杯)の実に粗末なものであった。

収容所の所長は若いハンサムな陸軍大尉で、そのほかに陸軍少尉と下士官(女性下士官を含む)がそれぞれ五人と、約十人の兵隊(主に警備兵)が配属されていた。作業は九月十日頃から始まった。朝八時に営門前に五列に並び、人員点呼後、作業場へ向かった。これには必ず警備兵が付き添った。

六、抑留後の作業分担

作業は木材伐採作業、自動車工場内作業、鉄道での石炭積み込み・鉄材積み下ろしなどで、それ

らがこの街の主な作業であった。それぞれの作業場へは二十〜三十人のグループで出かけるのが常であった。私はロシア語が分かったため、主に収容所内の炊事・倉庫・医務室等を回ったり、所内に設けられていた大工の作業室・床屋・鍛冶屋などを回って通訳として働いた。私は、第四収容所の一年間、第十一分所の一カ月及び第一収容所の一年間の計二年一カ月を常に通訳として勤務し、直接作業には加わらなかった。

七、抑留中の日常生活

収容者の入浴は週に一回で、街にある大入浴場へ行った。浴槽はなく、シャワーや桶で洗い流す簡単なものであった。余り清潔にはなれず、虱などもこの浴場で染されたと思われる。

労役の時間、作業内容、仕事量(ノルマ)などがどれくらい過酷なものであったかについては、直接労役には加わらなかったため詳細は不明である。ノルマを達成できなかった時どういう処分を受けたか、また達成した時どういう恩恵を受けたかについて

についても不詳であるが、何らかの処分や恩恵はあり得たと思う。一方、収容者として、ノルマを達成するために何らかの手段を講じたり、場合により画策を弄したこともあり得たと思う。また労役にまつわる様々な悲喜こもごもの出来事も発生したはずである。しかしここではその詳細は述べない。

八、抑留者に対するソ連の統制

ソ連側が我々抑留者に対してどのような扱いをしたか、多くの疑問点が残っている。それらを以下に箇条書きで述べる。それらがどの程度適正なものであったか否かについては読者の判断に任せる。

① 労役に就く否か、またはどの労役に就くかが、どのようにして判断され、決定されたか？

② 労役に就くことが猶予されたり、また免除された後に、就労に移る場合、それがどのような基準で処理されたか？ また、そもそもその基準はあったのか？

③ 労役に耐えられない者はどのように扱われていたか？

④ 健康の管理は常日頃どのように行われていたか？ それは健康を保つ上で役に立ったか？

⑤ 朝夕の点呼の状況及び作業場やその往復途上での監視の状況はどうであったか？ 異変はなかったのか？

⑥ 着衣等、衣服類についてどのように扱われていたか？ 特に厳寒・越冬用はどうであったか？ (旧日本軍用の防寒外套・帽子・手袋等の支給はあった)

⑦ 食事は十分であったか？ (食物の種類：主食は米または高粱、野菜は馬鈴薯、キャベツ。肉類や魚類なし。食事回数：三回/日。食事の分量：飯盒の蓋一杯/回。食物の不足分は所内物品販売所から購入した)

⑧ 休日回数と娯楽は適正であったか？ (休日：二回/月、娯楽：碁、将棋程度)

⑨ 収容所の施設・構造は適切であったか？ (採光：

普通、採暖：やや良好、起居：逐次改善はされ
たが不良。居住密度：極めて高く極めて劣悪)

⑩洗脳教育は適正か？第一收容所に入所以来、
「ソ連のマルクス・レーニン主義を主体とする
共産主義が至上最高のものである」という精神
を体して毎日の労働に励むことを趣旨とする教
育を受けたのだが？

⑪收容所生活の全般について

「收容者が自主管理することにより労苦が軽減
されると共にかえって能率が向上した」という
事例はあった。しかし、我々抑留者が労役に赴
く先の企業主の中には、この方式を受け入れる
企業主と受け入れない企業主があり、むしろ後
者の方が多かった。ただ昭和二十一年後半には、
企業主側がこの方式を受け入れて、抑留者の作
業の労苦が軽減され、企業主のノルマの向上に
も貢献したという報告を聞いている。

⑫懲罰について

私自身の体験はないが、所内営倉に一日ぐらい

に振舞った」ことである。

十、帰還

昭和二十二年九月十五日、コムソモリスク市の
第一收容所で帰還の報せを受けた。帰還集結地(ナ
ホトカ)までの道程はコムソモリスク市よりシベ
リア鉄道で千二百キロメートルであった。同年の
九月二十日、帰還者千一人は一人の脱落者も無く、
ナホトカより帰還船に乗船した。船内生活は必ず
しも平穏ではなかった。途中の日本海は波が高く、
半数ぐらいの帰還者は船酔いのため食べ物も食べ
ることが出来ない状態であった。九月二十二日、
無事舞鶴港へ上陸した。

私はコムソモリスク第一收容所でソ連将校によ
る民主教育を受け、通訳書記として一年間を過ぎ
せてもらった。昭和二十二年六月に初めて日本帰
国の通達があった。この時には收容者の中の健康
がすぐれない兵隊だけに帰国命令が出て帰国して
いった。收容所長は、この頃、日本将兵に対して
ほとんど毎日のようにソ連民主主義の教育に専念

入れられた兵隊もいた。

九、抑留中の信条

まず第一に、飢えと寒さと重労働は各人に共通
した労苦であったが、これらの労苦をどのように
して乗り越えることが出来たのか、またそのよう
な状況の中で自分を支えたものは何であったのか？
自己体験を通じて言えば、健康を保つことに
留意し、「あくまでもソ連側の指示に従い、企業主
の指示方針にも従う」ことを第一とすることを強
く自覚し、行動したことが幸いしたと思われる。

第二に、抑留生活は、極限すれば、死の淵に立
たされた状況の下での単調な生活の繰り返しであ
った。この中で、「あくまでも、健康でよく働き、
不正はせず、ソ連側に素直である」ことを信条と
して暮らすことにより、生への強い執着を持ち続
けることができた。

第三に、苛酷な抑留の中で心身の活性化のため
に、何に心がけたり、工夫をしたか？ 「あくま
でもソ連の将兵に気に入られるように明るく活発

していた。彼は、近い将来、日本へ帰ってからも
この精神を貫くようにとの願いを込めていた。こ
のような教育の後、九月半ばに第二回目の帰国命
令が出た。「ソ連民主主義教育を真面目に受け、よ
く働いたので帰国させることになった。よって帰
国者千人の名簿を作成せよ」という指示で、私は
自分を含めた千一人の名簿を作成した。これを見
た所長は最後の一人、小川の名前を消すように言
った。しかし、是非私を含めた千一人として帰国
させてほしいと懇願した。すると翌朝、所長独断
の帰国許可が出た。この時まで、ソ連の将校は頭
の固い融通のきかない国民性の人達だと思ってい
たが、予想外に温情のある人であることが分かり、
ただただ感謝あるのみであった。そこで次のお札
の言葉を申し述べた。

ラーゲリ アツヂエレーニヤ ナチャリニク
オーチエン スパシーボ ブラ ゴ ダリュウ
ワース！(收容所長殿、あなた方に有り難く感謝いた
します)

九月十八日の出発の朝、收容所の所長と他の下士官・兵士の見送りでコモソモリスク駅の広場から貨車で我々千一人の日本将兵は一路ナホトカへ向かった。ナホトカに着いてから、ソ連官憲の我々一人一人に対する検査点検の後、全員、帰国許可となった。九月二十日、帰還船恵山丸が港に横づけになった。確かに日本人船員の見える船であった。我々は嚴重なチェックを済ませて乗船した。船は出港した。船上から見下ろせば、ソ連将兵数人と女性下士官三〜五人が手を振って見送っていた。

「ド スビダーニア ド スビダーニア！（サヨウナラ！ サヨウナラ！）」

我々は港を出てからナホトカの港が見えなくなるまでいつまでもいつまでも深い感慨を持って見入っていた。長かった辛かった抑留生活よ”さらば”であった。

船内生活は至って和やかであったが、荒れ狂う波の起伏で大揺れとなり、気分が悪くなる人が大

勢出る騒ぎであった。九月二十三日に無事、舞鶴港に到着し、検疫の後、宿舍に落ち着き、厚生省の役人の事情聴取を受け、身体検査を受けた、これらは米軍将校の立会いの下で行われた。

十一、帰国後の生活

軍隊に三年五カ月、抑留二年一カ月の空白（五年六カ月の空白）があり、昭和十七年以前に勤務していた東京荒川の会社も空襲を受け、再就職は不可能となってしまった。そのため、郷里の両親の下で農業の傍ら味噌醸造業を開始した。後、昭和三十年、修善寺駅前地区に店舗を構え、現在に至る。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十年三月二十八日

学歴

昭和十六年三月 盛岡高等農林学校卒業

職歴

昭和十六年四月一日より十七年三月十八日まで
東京都荒川区尾久六丁目

株式会社 日東製飴研究所技手

として勤務

家族構成

妻と二人暮らし、他に三人 長女・長男・次男 東京在住

軍歴

昭和十七年四月十日 三島市中部第九部隊隅

田隊入隊

昭和十七年十月二十日 満州第三七六五部隊渡

満

昭和十八年四月五日 新京憲兵教育隊入校

昭和十九年 原隊復帰後編成替え、

ムーリン歩兵砲部隊に

編入

昭和二十年八月十五日 東京城で終戦

終戦抑留歴

昭和二十年八月二十日より二十二年九月二十日ま

で入ソ抑留、露語通訳

としてコムソモリスク

第四收容所等にて抑留

生活を送る

復員

昭和二十二年九月二十七日 ナホトカ港より舞

鶴上陸

復員後職業

昭和二十二年九月二十九日より家業の農業に就き

昭和三十年七月より現職（味噌製造業）に就き現在に至る

（静岡県 熊谷 精一）